

自分の頭で考えよう（Ⅲ）

星城高等学校
校長 寺田 志郎

我が星城高等学校男子バレーボール部が、高校バレー界において前人未到の「2年連続三冠達成」という大偉業を成し遂げました。このことは、学校といたしまして、誠に大きな喜びとするところでありますし、また、たいへん誇らしいことでもございます。

全国の強豪チームが「打倒星城」を目指して、日夜研究を重ね、血のにじむような練習を積んで挑んでくる中、それをこともなげに打ち破り、連覇を続けていった強さは、いったいどこにあったのでしょうか。もちろん、他校の研究や練習に対し、その量や質において、それを凌ぐものがあつたことと思います。「今のチームで戦っていくことを楽しみたい」とか「この仲間たちと最後までプレーできて幸せだった」という言葉に、選手それぞれが、確固たる自信と互いの信頼感を持って臨んでいると感じることができました。

最近、研究が進んでいる脳科学の分野でも未だに解決されていない問題にもなっていますが、優れた研究力や創造力を身に付けるにはどうすればよいのでしょうか。かつて、ノーベル医学生理学賞を受賞されたマサチューセッツ工科大学の利根川進先生は、「ノーベル賞の候補となるような研究をするには、創造性の高い研究をした学者を先生に持つことが大切であり、創造性の高い成果は、優れた指導者と、エネルギーと知性、高い志を持った若い研究者とが遭遇したときに生まれると思う」と言っておられます。独自性を出しながら、活発な競争をする中で、切磋琢磨していくことが研究力を向上させ、創造力を身に付けるもととなっているような気がしています。

もう忘れかけていますが、一昨年行われたロンドンオリンピックでは、日本選手団の活躍に日本中が沸き返ったことを思い出します。女子レスリングの吉田沙保里選手が、アテネ、北京に引き続き、三大会連続で金メダルを勝ち取りました。「勝つことが当たり前と思われている中で勝つことが一番難しい」とよく言われていますが、そういったところでの3連覇であります。そこへ至るまでの努力はたいへんなものであつたことは想像に難くありません。前人未到の世界大会14連覇のかかる中、出場選手の皆から標的にされる状況で、世界一速いタックルに、さらに磨きをかけての快挙に胸を打たれました。

彼女の父親も日本を代表するようなレスリング選手で、自宅にはレスリングの道場が設けられ、小さいころから身近にマットのある生活であったようです。でも、長年にわたって世界の頂点に立ち続けている陰には、栄和人監督の存在を忘れてはならないことです。「長所を伸ばす」という指導法で、世界一速いタックルに磨きをかけたそうです。個性を伸ばすには、独自の一つの型を作り、そこに繰り返しの努力を重ね、自信につなげていくことに尽きると考えます。人間性と専門性のバランスある指導者のもとで、お互いに努力しあえる仲間と一緒に鍛え上げることで、力量は必ず高まっていくと確信しています。

仲間たちに「康介さんをこのまま手ぶらで帰すわけにはいかない」とまで言わしめた水泳の北島康介選手と平井伯昌コーチ、着地をピタリと止め、美の極限を追求する体操の内村航平選手と具志堅幸司コーチ、また、学問の世界では、ノーベル物理学賞受賞の湯川秀樹先生、朝永振一郎先生、江崎玲於奈先生は、いずれも京都（帝国）大学で、日本の物理学の父、仁科芳雄先生の影響を受けておられます。こういった事例にも見られますが、スポーツや研究の世界における指導者とその弟子のような、強い信頼関係で結ばれた人間関係を学校教育の現場にも構築していく必要もあるのではないかと考えます。

数年前のことですが、経済同友会は、グローバル化が急速に進展する中で、教育振興によって優れた人材の育成を図る観点から、公教育に対する期待と同会が協力できることを提言としてまとめました。その中で、自立した社会人になるために高等学校卒業までに身に付ける必要な要素として、「基礎・基本的知識の習得」、「善悪の判断、忍耐、礼儀など社会性の涵養」など6点をあげております。今の高校生の姿を見て、この国際競争社会の中で、世界と伍して戦っていくことができるのかを心配しているのではないかと思います。同会教育問題委員会の遠藤勝裕氏は「自分の頭で考えること」そして「人の心の痛みが分かること」が極めて重要であると述べております。社会が若者に求めるものは、時代とともに変化していくことはもちろんですが、核心となる部分はしっかりと守っていくことが大切ではないでしょうか。

心の教育の充実が叫ばれて久しいわけですが、「武士道」を著わした新渡戸稲造氏によれば、最高の美德は「敗者への共感」と「弱者への愛情」であると言っておられます。また、歴史学者、アーノルド・トインビー博士は、国民精神のあり方の問題性を、①物より心の豊かさが忘れられていく時、②社会のなかで自律の精神が失われていく時、③大人が子どもに対して胸を貸さなくなった時、④指導者層が勇気と自信をもって、ものを言うことをしなくなった時、その時こそ社会全体の秩序が保たれなくなる前兆であると指摘しております。今こそ、親や教師など大人が若者に対して、自信を持って堂々と胸を貸し、一人で

も多く的高校生が、自分の感情を制御し、他人に対して何ができるかを考えて行動するよう育成するために、それぞれの役割を果たしつつ、一体となって取り組んでいくことが大切ではないかと思っております。

そこで、星城高等学校男子バレーボール部の強さの秘密についてであります。優れた指導者のもと、高い志を持った選手たちが活発に競争しながら、個々の技量を磨き、チーム力を高めていったものと考えます。「感謝の気持ちを忘れずに」を部訓とし、単に教えられたことを守っていくばかりでなく「自分の頭で考えること」に心がけ、常に、チームメートのプレーに対しても「人の心の痛みが分かること」に徹し、ずーっと勝ち続けても「敗者への共感」を忘れずに精進・努力してきた結果として、このような盤石な組織ができあがってきたのではないかと考えています。

教育改革という大きなうねりの中で、教育の世界にも「市場原理」が少しずつ入り込んできているように思います。学校評価制度における説明責任と結果責任など社会の厳しい視線にさらされているわけですが、学校経営の改善や教育目標の達成に向けて真剣に取り組んでいかねばならない問題だと思っております。さらに、「契約概念」の導入がすすみ、契約者のニーズを的確に判断し、それに応えなければ契約不履行になるとの考え方が成立する事態も想定されるところであります。教師が職業としてプロである以上、契約者の最大の関心事への実現の期待に応える必要もでてきますし、効果が上がらなければそっぽを向かれるという構図ができあがりつつあります。教師とは、「昨日の自分より今日の自分をよりよく生きられるよう指導してくれる人」と言われています。教える立場にある者が、さらに、「明日の自分」により良い影響を与える一言がかけられるよう、「学び続ける教師像」が求められていることに鑑み、教師自らが研鑽に励む姿勢を確立していくことが大切であると考えます。

本年度、創立 50 周年を過ぎ、新たな第一歩を踏み出そうとしている本校にとりましては、初心に立ち返り、創始者の高邁な「建学の精神」を思い起こし、これまでの輝かしい実績の上に、さらなる、歴史と伝統を積み上げるべく、確固たる理念・信念をもって邁進努力することが大切であると考えます。「教育改革は授業改善から」というメイン・コンセプトのもとで、開始されたこの「中等教育研究部」の活動もすでに 6 年目を終えようとしています。今年度は、電子黒板（メディアボード）という新たな教育機器を利用した授業研究や「さっさ立て」という古典的なパズル数学、新幹線等の時刻表作成の「ダイヤグラム」など生徒が関心を持ちやすい教材を取り上げたもので、数学科の教員である自分にとっても興味深く参加することができました。優れた指導者のもとで、意欲あふれる教師

が、研究授業とその授業分析を行っていくことを通して、教科指導力を向上させてきた実績は高く評価されるべきことでありまして、研究員の先生方の精進に対し、敬意を表しますとともに、ご指導にあたってられました深谷孟延先生、坂本篤史先生に心から感謝申し上げます。